

# 15世紀のバス・ダンス 再現の試み

村山茂代

## 1. バス・ダンスの歴史

バス・ダンス (Basse Danse) は、ダンスのステップが初めて記録された(1445年)ダンスとして、舞踊史の上では重要視されている。このダンスは15世紀のヨーロッパにおいて、貴族達の間にも最も流行した社交のためのダンスであり、また結婚式のプロセッションとしても踊られた。しかし16世紀末には、人々からすっかり忘れられ、現在では文献に残るのみである。

## 2. バス・ダンスの資料

15世紀のバス・ダンスの資料として、まず第一に上げられるのは“The Brussels Manuscript”(資料1)で、この手書きの豪華な本は編者及び筆者は不明である。おそらく、15世紀の後半に書かれたものと言われている。内容は58のバス・ダンスのステップと音楽が記録されている。その他ステップの説明及びバス・ダンスのセオリーも書かれている。この時代では、本は非常に高価なもので、貴族達にとって宝物の一つであった。このダンス・マニュアルは黒色の紙に金で五線が引かれ、そこに銀で音符が書かれている。五線の下には、バス・ダンスの題名と音符の数及び、measure (ダンス・ステップのひとつかたまりを意味する)の数が記入され、その下にダンス・ステップが記録されている。次に、これと同じ頃に印刷されたものと言われているMichel Toulouzeによる“L’art et Instruction de bien dancier”(資料2)がある。Toulouzeは、ダンシング・マスターでなくプリンターである。これも誰れによって編集されたのか不明である。内容は48のバス・ダンスの音楽と、ステップ及びステップの説明やダンスのセオリーが書かれている。(資料1)と同じように、各々のページに二つずつバス・ダンスが掲載されている。(資料1)及び(資料2)の上段のバス・ダンスは、“Le petit Rouen”と言う題で、これは、その他のダンス・マニュアル (Salisbury 1497, 及びRobert Copland 1520)にもみられる。おそらくこれはポピュラーなバス・ダンスであったと思われる。そこでこの“Le petit Rouen”のダンスと音楽の再現を試みた。

## 3. リ クリエーション

バス・ダンスのステップは、R: Reverence, b: branle, s: simple, d: double, r: reprise, c: congéの6つのステップによって構成されている。音

符の数とダンス・ステップの数が同じであるから一つの音符はステップの時間的長さをあらわしているのであるが、どのくらいのテンポで演奏されたのか不明である。現在、音楽家が演奏するバス・ダンスの曲のテンポでは、15世紀の絵画などに見られる衣裳を着てのダンスは不可能と思われる。

15世紀において、バス・ダンスが踊られた結婚式や舞踏会は、貴族達にとって重要なイベントであった。ダンスの技能を見せる機会であったばかりでなく、彼等にとって、高価な衣裳をまとして衆目の中に立つことは、自身の財力や権力を示す良い機会でもあった。彼等は互いに豪華さを競い合ったことだろう。

“Wedding Dance”(1500)と題した絵(資料3)は、フランスのバーガンディ地方の上流階級の結婚式を描いたものである。女性は円錐形の長いベールのついた帽子(身分の高い女性程帽子の高さは高かったと言われている)をかぶり、腹部にボリュームをもたせた、長く裾を引く服を着ている。当時は、糸を練る技術が未熟であったため、太めの糸で織られた布であった。その上に、金糸や銀糸で刺繍がほどこされ、宝石が縫いこまれていたので、かなり重い衣裳をまっていた。男性にとっても、帽子は身分をあらわすもので、身分の高い人程複雑な形のものをかぶっていた。肩や胸にパットを入れ肩幅を広く、厚く見せるダブルを着、しかし脚部はぴったりとしたタイツ(現在の伸び縮みする材質のものではない)をはいて、先きのとがった靴をはいていた。現在のダンス・コスチュームの概念からは全く異なったコスチュームである。

ダンス・ステップのテンポを考えるために、まず(資料3)にならってコスチュームを製作し、着用して踊ってみると、一つのステップは約4秒余りは必要だと言うことがわかった。又ステップは、3カウントで踊るより4カウントで踊る方が踊りやすかった。以上の二点をミュージコロジストに伝え、音楽のリ クリエーションを依頼した。

元来ダンスの動きを文字で書きあらわすことは困難である。その上これらのダンス・マニュアルは、バス・ダンスを知っている人のために書かれたものであるから説明は簡単である。だから、バス・ダンスのステップを再現するにあたって、研究者によってその受けとめ方が異なる。

この分野の研究ではバイオニアと言われるイギリスのMabel Dolmetschは、“Le petit Rouen”の音楽とダンスの再現を試みている。ダンスについては、彼女自身のリエーションを加えているので信頼しがたい。音楽については、全く踊ることが不可能である。アメリカでは、Ingrid Brainardが現在この分野の第一人者である。彼女の研究は広範囲にわたる文献によって支えられ、研究の成

果は認められている。

さて、各々のステップをどのようにリクリエーションしたかであるが、まずReverence(R)はおじぎを意味する。当時の人々にとって、おじぎは日常的動作であるから方法についてくわしい説明はない。Brussels MS, Toulouzeのプリント及びCoplandeの説明をみると、男性のおじぎは「左足です」と言うことはわかるが、どのようにするのか全くわからない。そこで15世紀の絵画をみると、おじぎの場面を描いているものには、左足を後ろに引いているのがみられる。本来おじぎをすること“to bow”は「膝をまげる」ことを意味しているということなので、Reverenceは左足を後ろに引き両膝をまげることにした。Thoinot Arbeauによって書かれたダンス・マニュアル“Orchesography”(1589)によると、おじぎと共に帽子をとることが書かれている。しかし、15世紀のダンス・マニュアルには帽子をとることについて何も書かれていない。この点についてBrainardは、「15世紀の男性は複雑な形の帽子をかぶっていた。4又は3カウントの間に帽子をとっておじぎをし、また帽子をかぶり直したとは考えられない。おそらく、15世紀の男性は帽子をとらなかつたであろう。」と言っている。女性のおじぎの方法については、15世紀のダンス・マニュアルの中には書かれていないが“to bow”本来の意味を考えて、Arbeauが述べているように、両脚をそろえて立ち、そして両膝をまげる方法をとった。男性及び女性ともに、おじぎの時は上体をまっすぐにたもち、互いに目を交し合ったと言われている。

branle(b)は横にスイングする動きで、左足そして右足と体重を移す時、やさしくパートナーと目を交し合うことがダンス・マニュアルに述べられている。

simple(s)は前に一步進む動作で、二歩で一つの音符の長さとなっている。

double(d)は三歩前進し、四歩目は両足をそろえるように考えた。

reprise(r)は説明が不明瞭で、リクリエーションするには最も困難なステップである。

Brainardは、まず後ろに足を引き、その足に体重をかけ、次に前足に体重を移し変えるようにリクリエーションしている。彼女は「このようにしたこと満足している」と、インタビューで言ったが、15世紀のダンス・マニュアルからは、そのような前後に揺れる運動は考えられない。むしろシンプルに、後ろに下がるステップではないだろうかと思う。

congé(c)はバス・ダンスの最後にするおじぎで、パートナーと観客への感謝をこめてReverenceと同じような方法で、ゆっくりとするおじぎである。

各々のステップのはじめは、男性及び女性とも

左足からはじめる。repriseのみ右足から後ろにさがるようにした。

ステップの説明には、“raising the body”と言う説明がしばしばある。ステップの始めは体を上げるようにし、ステップの終わりは膝をまげるようにして、ダンスの動きに高低をつけるように考えた。

15世紀のダンシング・マスターGuglielmo Ebreoは、踊る時の女性の姿勢について“Her glance should not be proud nor wayward, gazing here and there, as many do. Let her, for the most part, keep her eyes, with decency, on the ground; not, however, as some do, with her head sunk on bosom, but straight up, corresponding to the body, as nature teaches almost of herself.”と述べている。15世紀の女性の帽子は、自由な首の動きをさまたげたことだろう。うつむきかげんで踊る女性の姿勢は、貴族達にとって美しくグレースフルに見えたのかもしれない。

#### 4. まとめ

バス・ダンスはおじぎに始まり、おじぎで終わる。つまり、おじぎはダンスの一部である。日本舞踊の作品にもおじぎで始まり、おじぎで終わる作品があり、奇妙な一致があってもおもしろいと思った。

日本人女性が着物を着た時に経験することであるが、普段は洋風の衣服にすっかりならされているから、非常に窮屈な思いをする。歩行は歩幅をせまく、内またで歩かなければならない。それは、着物が体の自由な動きを制限していると共に、裾を乱して歩いたら「みっともない」と言う伝統的な美意識があるからだ。日本人としてのこのような経験は、この研究の初期の段階で、ダンスが単なる身体の動きとしてとらえるのではなく、小さな動きでもそこには、その時代や、国・社会の文化が影響し合っているものと考えた。だから、この研究にあたって単にダンスの動きのみならず、バス・ダンスを繁栄させた文化、歴史的背景など、広範囲にわたって調べ、バス・ダンスの再現を試みた。

この研究は、舞踊史の理解を深めるために、またダンスの動きについてセンサビリティを養うためにもよい研究であったと思う。

